

勝林寺報

「正信偈」のはなし

能発一念喜愛心 信心ひとたび おこり
不断煩惱得涅槃 なやまを断たて すぐ
いあり

このことばの前は「応信如来実言」(釈迦如来さまの、お説きくださる、真実のことばに耳をかたむけて聞き信じましょう)とありました。ですから、ここから後、「難中之難無過斯」までは、主に、お釈迦さまのお説きになった真実の教「大無量寿経」のおことばをとり挙げて、みんな心して聞かしてもらおうと親鸞さまはおうたいになるのです。

まず、ことばの意味。「能く、一念喜愛の心を発すれば」とあります。「一念」とは「ハツと一瞬に疑い晴れ心のひらかれる」ことです。「喜愛の心」とは「歡喜・愛樂」などもいって、身も心もよるこびに満ちまかせ切つた心のことと言つたことばです。

「如来さまの親心が、ようやく到り届いて、そうであつたのかと、如来さまとの出会いに身も心も晴々としたとき」という意味です。そうした一瞬に、「煩惱を断ぜずして涅槃を得」るのだと説いてあります。

このからだのあるかぎり、つきない欲望や、はてしない愛憎や愚かさは、とうていなくなりはいけません。その私が、如来さまに出会い、如来さまのいのちに生きかえつた一瞬、その信のよるこびのなかで、煩惱の身であるまま煩惱を越え、生死の身でありながら生死を出する「涅槃」の道につかせていただくのだと親鸞さまはおよろこびなさるのです。

三月三十一日『朝日』の「天声人語」に次のようなことが書いてありました。

無着成恭さんの最近の著「ヘソの詩」に、ある少女の詩がのつています。その詩は、この少女が六年生になつたとき、お母さんに「とつても大切なもの」といつて、プタのしつぽみみたいなヘソの緒をみせられる。そのときの感動をうたつた詩です。

このヘソの緒で私とお母さんは結ばれてたんだ。それで私は生きてたんだ。

このヘソの緒がなかつたら私は生きていられなかつたのだ。

そう思つたら、これはとつても大切なものなんだと思われてきた。

六年生になつたときこの子は、ヘソの緒によつて、つながつてた。お母さんとのいのちの出会いに感動したのでした。

このクラスでは、このヘソの詩をきつかけにして、ヘソの緒の勉強をはじめたのだそうです。

お母さんと私とを結んでいたヘソの緒には、お母さんの血が流れていたのか、赤ちゃんの血が流れていたのだろうか。

その結論。

赤ちゃんの血は、お母さんの胎内にあるときからすでに、お母さんの血とは違う赤ちゃんの血をもつています。母と子は、胎内であつて一体であつて、しかも一体ではない。一体でないものがヘソの緒を通じて一体であるということがわかりました。

ヘソの緒が切れて、もう完全に母と別の体になつても、目に見えないヘソの緒は、いつもつながつていようです。その証拠があります。

母親はふつと、赤ちゃんを自分の左側に抱くが、これはなぜか。胎児は、暗い胎内の世界で、母親の授けてくれる羊水を飲み、母親の心音を守り歌にして育つ。だから生れたあとも、懐かしい母の心音を聞く心やすらぐのだから。

目には見えない母の心音を、私はいまももつていらずである。

目に見えないヘソの緒を、私はいまももつていらずである。母の体から離れ出て、母とは全く別のいのちを生きていられる私ではあるけれども、母の心音は、いつも私のいのちのなかに響きつづけていた。

この少女は、六年生のとき、ヘソの緒を見て、自分のいまのいのちの内、母の心音を聞いて、母の懐にあるよるこびとやすらぎを感じたといふのです。

私は、煩惱にくるわされて生きる罪悪深重の凡夫です。

私のくらしには、真の欲びもやすらぎもありません。

そんな私に、いま、遠い遠い昔から、私を抱きどうし呼び通しの如来さまの心音が聞こえてきます。

南無阿彌陀仏のお念仏です。

その呼び声、心音(これを本願名号といひます)が、私のこの煩惱のいのちに響き聞こえてきた一瞬に、私は煩惱の身でありながら、如来の無量のいのちのなかに生きかえり、如来の不可思議な光のなかに安らぐことができるのです。

「信心」(如来との出会い)のなかだけで、真実の歡喜と愛樂と涅槃とがひらかれるのだと示したのが、この「正信偈」の一句です。

老来りて始めて道を行せんと
待つことなけれ
古き墳、多くはこれ少年の人
なり。



四月のこよみ

- 一日 出石相連合仏協役員会・評議員会
- 二日 山田健一氏宅法事・豊岡信楽寺法事
- 三日 湯口孝春氏宅法事・八代光顕寺永代経
- 八日 上小田「連研」
- 十日 教森弘道氏宅法事
- 十一日 山田富雄氏宅法事
- 十二日 北但三組仏協連合同「開法のつどい」(豊岡徳証寺)
- 十三日 住職坊守短期研修会
- 十六日 山田正直氏宅法事
- 十七日 山田芳美氏宅法事
- 十八・十九日 組面変更企画会議(神戸)
- 二十一日 出石組「降誕会」
- 二十二日 長専寺忌日
- 二十四日 本覚寺法事・仏社仏協合同春季研修会(観桜会)
- 二十五日 「みのりを聞く会」
- 二十九日 教森正之氏宅法事・長専寺忌日・「連研」
- 三十日 兵庫教区仏社大会(加古川)
- 長谷川政次氏宅法事
- 二十六日 多田正夫氏宅を明

毎年、仏社仏協合同で行なつています「春の研修会」(お花見)を、今年も催します。開法と親睦のつどいです。多数のご参加をお待ちしています。

春季研修会
会費 一人千五百円

※仏社の理事・仏協評議員様は担当地区の出席者と会費とおまつりの上、人数を二十日迄に寺までご連絡ください。

きようだいげんかも

同じ母の乳房をふくむとき

消えていつた。

人と人との

麻糸のもつれも

一つ親のもとでなければ

解けはしない。



姓名判断

K子さんは、かつて「おはよう朝日です」の八お名前プレゼントコーナーに出演しました。

それは、区役所への届出期日がせまつたのに、どうにも子どもの名前が決まらず、それで参考にと軽い気持ちから応募したので。

医者から、子どもが出来ない体だと言われているだけに、生れてきた赤ちゃんにはなんととしても立派な名前をつけてやりたかったのです。

姓名判断の本を五冊買いそろえて研究しました。K子さんは言います、

「私自身、むかし易者から、三十にならないうちに死ぬると言われてから、占など信用しないようにしていたのですが、なにしろ、あきらめていたのに出来た赤ちゃんですから、つい赤ちゃんの将来を見てみようと思つて、」

そして、プレゼントコーナーでつけてもらった名前を、五冊の本と照し合わせてみたのです。

するとまあ、重大なことに気がついたので。 「どの本も、字の面数や発音などから、人の運勢や運命を見る方法をとっています。でも、本によつて、みんな吉凶が違ふのです。なにがなんだか、全くだいげんなものにだまされていたのだということに気がついて腹が立ちました」

K子さん宅では、家族会議まで開きました。

その結果、全く子どものことを知らない占い師にわざわざ頼らなくてもいいことになりました。 K子さん。

やつぱり親の私たちが、この子に親のいつぱいの願いをこめた名前をつけてあげることになりました。はじめはこれらの本を信用していましたが、自分自身で体験してみても、どんなにいいかげんなものであるかわかりました。でたらめな本に腹を立てるよりも、今は、赤ちゃんにすまない気持ちでいつぱいで

入学おめでとう

- 坂本 正行くん(坪口)
- 中島 煥典くん(坪口)
- 村田千亜紀さん(坪口)
- 湯口百合子さん(梶見)
- 横山 寿美さん(梶見)
- 成田 教子さん(和屋)
- 藤本 裕子さん(神戸)
- 坂本 育美さん(日野辺)
- 斎藤 瑞恵さん(小田)
- 田中恵美子さん(八鹿)
- 石田 竜介くん(佐田)
- 兼井 司くん(栗尾)
- 兼井 江里さん(正法寺)
- 宮島 篤志くん(小谷)
- 衣川 庚子さん(野尻)
- 永井 正則くん(矢根)
- 森井佳代子さん(日殿)



しつかりおべんきようして、よい子になつてください。おてらから おゆわいをおくりまします。

人の短を

言うことなけれ

己が長を

説くことなけれ

一巻一

念仏奉仕団募要項

昭和五十八年で第十八回目を迎えます出石組仏連盟主催の念仏奉仕団の実施要項が出来ました。一人でも多く、さそい合つてご参加ください。なお、例年、納骨式も併せて行ないますので、昨年の式以降に亡くなつた方のご遺族は、遺骨のおともをして必ずお参りください。

日時 六月八日(水)・九日(木)
費用 一万二千元
概要 八日 前五時出石全但營業所集合→五時十分出発→九時本山到着・奉仕 拝観 宿泊(本願寺門徒会館) 九日 午前中奉仕・昼食→西大谷納骨式→東山の靈山観音拝観→後八時ごろ出石着 申込 予納金二千元を添えて四月末日までに 勝林寺へ。

春の研修旅行計画さまる

仏壯仏婦の会員から待たれていた春の研修旅行の計画が去る合同役員会で決定しました。今年は大坂の津村別院にお参りし、開城四年の大坂城をおとすれまます。村うちさそい合ひ、うちこそつて参加してください。

日 六月二十五日(土)二十六日(日)

参加費 一人二万一千円

旅程 二十五日(前七時半出石発→(バス)大阪津村別院・昼食→大坂城→後五時新和歌の浦双子島荘) 二十六日(前九時旅館発→紀三井寺・昼食→和歌山城→後八時出石着)

詳細は後日お知らせします。

わしや しゃわせ

じひに みぢられ

みちたじひは どこに出る

なむあみだぶと くちにでる

これにさいちが たすけられ



拜 儀

三月五日

久畑・光蓮寺住職 松谷恵秀様

三月十三日

鳥井・長寿寺前住職 玉岡東洋様

三月十九日

市場 多田 さく五様

はりかわる

風のつよい日には、縁の下から床のすき間を通して、ほこりを吹きあげます。床のあちこち、ささくれ立つて、いたみが目立ちはじめていました。

前々坊守(住職の奥母)と毎早朝ふきあげたことのある床であつたのですが。その母の五十回忌の法要を勤めました。永代経をあげさせてもらうつもりで張りかえを考えていました。

せつかくのことならということ、中嶋有隆総代様が、見事なケヤキ板をお世話下さいました。得難い立派な材質です。入念な細工施工です。

お内陣全体、明るく光彩をはなつています。うです。